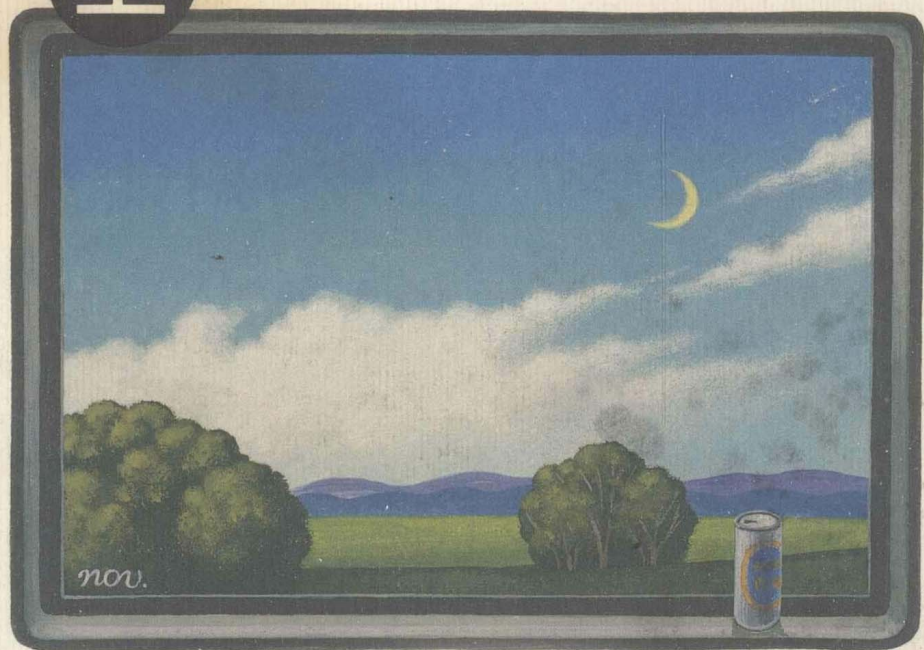


空 想 列 車

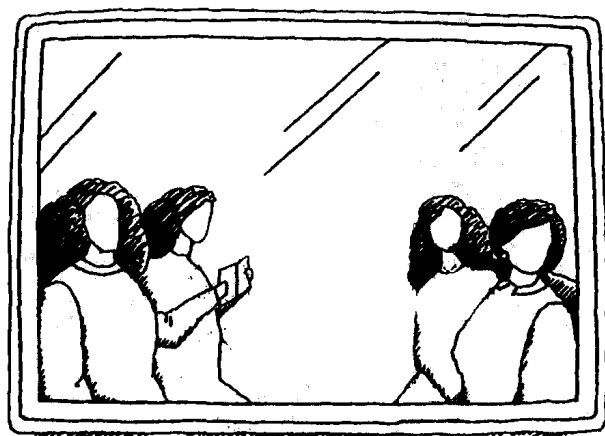
阿刀田 高

上



空 想 列 車

上



阿
刀
田
高

空想列車（上）

平成二年四月十日初版発行

著 者 阿刀田 高

発行者 角川 春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三一三

電話 営業部〇三ー八一七ー八五二一

編集部〇三ー八一七ー八四五一

振替口座 東京三一ー九五二〇八 千一〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたします



Printed in Japan ISBN4-04-872582-3 C0093

空想列車(上)

目次

プロローグ

1 信子

2 めぐみ

3 千鶴

4 マドカ

5

24

102

154

243

装丁／矢吹申彦

プロローグ

朝から降り続いていた雨も小降りになったらしい。

それとも、もう降り止んだのかしら。

列車の窓からガラス越しに雨の糸をたどるのはむづかしかった。通行人を見つけて、傘をさしているかどうか、それを確かめればいいのだが、線路沿いの道には人影もない。しばらくは倉庫のような建物が続いている。

ようやく赤い傘を一つ認めて、

「まだ降ってるのねえ」

と、伊駒信子が独りごとのようにつぶやいた。

熱海発、東京行き普通列車。車両の後部に四人がけの座席があり、四人の女がすわっていた。

信子は窓側の席に、進行方向へ顔をむけて腰をおろしていた。

その膝のすぐ前で久賀めぐみが週刊誌のページをめくっている。信子の声を聞いて窓の外に視線を移した。

しかし、あいづちを打つわけでもない。

「午後には晴れるような話でしたがねえ」

ななめ向かいの席から小早川千鶴が答えた。片足を通路のほうに踏み出している。四人がけの席は四人ですわるには少し狭い。

もう一人、信子の隣で文庫本を読んでいた女は、チラリと目をあげたが、またすぐにもとのページに視線を戻した。膝に載せた布製のバッグにM・Hと刺繡しゅうがほどこしてあるのは、原マドカのイニシャルだろう。

土曜日の四時過ぎ。車内は座席がちょうど埋まるほどの込みようである。ドアの近くに三、四人、立っている乗客の姿が見える。

列車がスピードを落とした。

駅が近づいたのだろう。窓の外の傘が少しずつ多くなる。だが、傘をさしていない人の姿もあるから、さほどの降りではないらしい。夜に入れば予報通りに雨はあがるだろう。

四人の女たちは顔見知りではない。たまたま同じ列車の同じ一郭に乗りあわせただけのことである。

伊駒信子は熱海で乗った。

久賀めぐみが乗ってきたのは真鶴まなづるだった。

小田原に着いて、小早川千鶴が、

「ここ、あいてます？」

と尋ねてすわった。

女性は、やはり女性が腰かけている一郭を選ぶ。男性三人に囲まれて行くのはつらい。

「すみません」

黒い上着に黒いパンツの原マドカが乗って来たのも小田原だったろう。

四人の女は、年齢も、顔立ちも、立場も、この列車に乗っている事情も、みんなそれぞれがっている。

めずらしくもない。毎日の生活には、こんな瞬間がいくらでもある。

列車が国府津に着き、思いのほか長い停車時間のあとで、ガタンと一つ揺れて走りだした。伊駒信子は熱海の美術館を訪ねた帰り道だった。今朝、子どもたちを幼稚園へ送り出し、夫が会社へ出るのを待って家を出た。家は品川の海寄りにある。往路は急行を利用したが、帰りは熱海駅に来て、出発を待っている普通列車に乗った。

美術館めぐりは最近覚えた趣味である。たいてい一人で行く。絵を見ることも好きだが、それ以上に、だれにも束縛されずに美術館の静かな部屋をめぐるのが好きだった。ウィークデーの美術館は、特別な催し物でもないかぎり人数は少ない。洗練されたたたずまい。美しい内装。日常性を離れた、ロマンチックな気配がある。

小さな冒険……。

電車で遠出をしたときは、さらにこの感覚が強い。まったくの話、訪ね歩いてみると、東京と東京の周辺にはほどよい美術館や博物館がたくさんある。一つ一つ計画を立ててめぐり歩く。ときには当てがはずれて落胆することもあるが、それがまた楽しい。失敗があればこそ、成功したときの喜びが大きい。

夫にも、子どもにも話さない。うちあけてみてとくに不都合はなからうけれど、だれにも知られていないこと自体が少し楽しい。

小さな秘密……。

そんな情況に身をひたしているうちに、なにか思いがけない出来事に遭遇するかもしれない。

映画の中の登場人物みたいに……。

熱海の美術館は、ある宗教団体が運営するもので、

——宗教って儲かるのね——

釈然としない気持ちも少し味わったが、そんなことに今さら義憤を感じてみても始まらない。贅沢な雰囲気はそれなりに心地よいものだった。いくつものエスカレーターが連なり、さながら天国へでも昇って行くような感覚だった。

——なんの映画かしら——

思い出すものはなにもないのだが、信子の心の中には一つの風景がある。一つの物語がある。ヒロインが美術館の回廊で絵を眺めている。

「きれいな色彩ですね」

声に驚いてふり向くと、男が立っている。

信子自身は、ついこのあいだの誕生日で三十五歳になった。だから、男の年齢は四十歳くらいがよい……。背広を着た、感じのいい男。美術館に来るくらいだから、センスはわるくない。

「本当に」

はにかみながら信子が答えて、そこから物語が始まる。

——映画じゃなく、小説かもしれない——

列車の振動に体をゆだねながら、ぼんやりと考えた。今までに見聞した物語ではなく、これから始まることかもしれない。そんな予感を抱くのが好ましかった。

久賀めぐみは、週刊誌の占いのページに目を止めた。占いなんか本気で信じたことはないけれど、そんなページがあれば、たいいてい自分を当てはめてみる。

十月二十七日生まれのさそり座。

さそりなんて絵でしか見たことがないのだが、さそり座という名辞はまがましい響きがあった、きらいではない。星占いにはそのほうがふさわしい。

——今まではあんまり平凡すぎたから——

これは本当だ。

四国の松山で育って、地元の短大を卒業した。そして市内のデパートに勤めた。

勤めてくれる人があって、東京のサラリーマンと見合いをし、望まれて結婚に踏み切った。

——東京へ行ける——

地方に住む者のつねとして東京の生活には一定の憧れあこがを持っていた。松山はけっして小さい町ではないけれど、一生そこで暮らすのは夢がなさすぎる。やっぱり田舎は田舎である。

デパート勤務は家具売り場だった。豪華なベッド。豪華なソファ。売り場のすみに造られたキッチンは、快適な生活をまのあたりに感じさせてくれる。めぐみが育った家の台所とはおおいに

ちがっていた。

東京へ行けばそんな生活が待っていると、そう単純に思い込むほど世間知らずだったわけでは
ない。

夫は世田谷^{せたがや}の地主の次男坊。区役所に勤めている。

「東京で土地があれば、それだけで言うことがないさ」

「勤めも堅いところだし」

経済的な条件が、めぐみに結婚を承諾させた第一の理由だったろう。

——東京で豊かな生活が送れる——

期待は半分ほど報われたが、どこか少しちがっている。

夫の親からもらった土地にマンションを建て、その一郭を新婚の住まいとした。家具売り場の
豪華な家具を並べるほどの生活ではないけれど、自分の家があるだけでも恵まれている。夫の給
料はけっして高くはないが、そのことにはさして不満はない。

だが、結婚をして九か月。

——こんなものなのかしら——

早くも倦怠感^{けんたいかん}を覚えるようになった。ひとことで言えば、夫に対する不満だろう。

——この人なにを考えているの——

まじめな人にはちがいないが、冴^さえたところが少しもない。田舎の人よりもっと田舎くさい。
おそらく頭のいい人ではないだろう。たいした学校を出ていないことは初めからわかっていた。

でも、

——人間の価値は学歴なんかじゃないわ——

これは一つの真実である。あのときはとりわけめぐみの気持ちがそんな方向へ傾いていた。このごろはむしろ、

——男は頭のいい人がいい——

もちろんお金も大切だけれど……。

結婚をしてみても、めぐみは自分が人生についてなにを望んでいるのか、少しずつわかるようになった。

たとえば、よい家庭……。

——だれだって、そうだろうけれど——

よい家庭の中身が少しずつ明確になったと言えば、わかりやすい。

上の下くらいの経済生活。庭つきの家に芝生が植わっていて、玄関の脇には白い自動車が停ま^とっている。夫は仕事もよくやるが、家族も大切にする。一家の団^{だん}楽……。子どもたちは、父親の話に耳を傾ける。父の話は、とてもおもしろい。ためになる。ユーモアをまじえ、おもしろさの中に、教養の深さを感じられる。子どもは二人か三人くらい。男の子は賢くて女の子は器量よし。みんな輝かしい将来が約束されているような子どもたちである……。

——でも現実がちがうわ——

経済生活のほうは理想通りにはいかないまでも工夫のしようがある。娘の器量は、

——私の遺伝なら大丈夫——

われながら多少の自信はある。

遺伝といえは、心配なのは、男の子のおつむのほう。めぐみの夫は、どうひいきめに見ても教養とは縁が薄い。面ざしは思慮深そうだが……少しだまされちゃったみたい。本箱にはろくな本が並んでいないし、一番の趣味はカラオケを歌うこと。将棋も好きらしいが、努力のわりには腕はあがらない。頭がわるいのだ。

——こんなことでいいのかしら——

子どもたちには第一級の人生を歩んでほしいと思う。めぐみは子どもが生まれないうちから、そんなことを考えている。

今日は真鶴の病院まで知人の見舞いに行った。干魚の匂いが町のところどころにこもっている。めぐみはあの匂いが好きになれない。列車に乗っても、まだ匂いが追って来るような気がする。

——早く晴れてくれればいいのに——

垂れこめている雲もうつとうしい。週刊誌もつまらないし……。

小早川千鶴は小田原に住んでいる。夫は仕事一筋のサラリーマン。定年もそう遠くないから、ここ数年が役員として残れるかどうかの分岐点。必死になって働いている。

そんな夫に連れそって二十数年を過ごして来た。生活を切りつめ、子どもを育て、

「私や、やりくり三段ですからね」

そうつぶやくのが、千鶴の得意のジョークだが、本当にレジャーなどとは縁遠い人生だった。

夫は文字通りの亭主関白。やたらにいばっている。気むつかしくて、一緒にいて落ち着かない。楽しめない。ゆっくり考えてみると、千鶴はずっとお手伝いさんのような立場を演じて来たような気がする。

少し不満がある。家が遠いので、夫は品川にワンルームの宿を持っている。今日はそこへ掃除やら洗濯やらをしに行くところだった。

原マドカの職業は編集者。小田原に住む作家のところへ原稿を取りに行き、その帰り道である。たいていは新幹線を利用するのだが、向河原^{むかいはら}に住む挿し絵画家のところにも立ち寄りなければいけない。そのために川崎で降りて南武線に乗る。

——首都圏は広いから——

つくづくそう思う。寄稿家の住所は全都六県にまたがっている。能率よくまわらなければ仕事にならない。

電車の中ではもっぱら推理小説を読む。今読んでいるのはヘンリー・スレッサーの短篇集。前から読みたいと思っていた本だが、小田原の本屋で偶然見つけた。切れ味が鋭いので楽しめる。

——私が殺すとしたら、やっぱり夫だな——

ときどきそんなぶっそうなことを考える。

マドカの夫はテレビ番組の制作会社に勤めている。

「私、普通の奥さんにはなれないわよ」

「いいよ。気ままにやろう」

そう約束して始めた結婚生活だった。

もう六年になる。子どもはない。

おたがいに不規則な仕事を持っているから、すれちがいが多い。東中野のマンションには、どちらも眠るために帰るようなものだ。

新婚のころは心に張りがあったけれど、少しずつ風化して、今はただの同居人同士のような気分になってしまった。

——あの人、浮気してるな——

確証はないが、匂^{にお}って来るものがある。怒る気にもならない。そのあたりがむしろ夫婦として一番困ったことなのだろう。

——男より仕事のほうがおもしろい——

編集者としてようやく一人前に扱われるようになった。つらいこともあるが、やり甲^が斐^いはある。自由に生きるのはわるいことじゃない。

だから……と考えるのは、論理に少し飛躍があるだろうけれど、ミステリーを読むときには心のどこかで夫殺しを考えている。

——このトリックなら、きつとうまくいくわ——
と、膝^{ひざ}を打つ。

しかし、現実には推理小説のようにうまくは運ばない。それも充分にわかっている。わかっているから、あれこれ想像する。